

値頃感の強いもの、愛玩できる物が、その時代々々の主役を握っているようである。電子ゲームの流行や、ラジコン四駆などにより、この傾向に変化をみせてはいるが、本質的な部分は、大きく変わっていないようである。また大人から子供へと流れていた流行のパターンも、現在では、逆行している部分も多くみられる。ここには、子供達の情報量の増大という

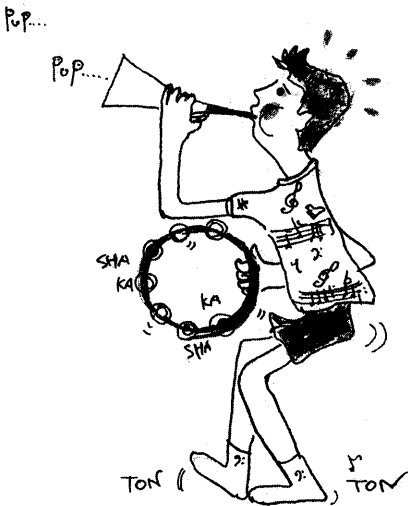
遊びの中の電車

西原 彰宏

問題も多分にふくまれている。

ミニ四駆の六〇〇円という価格が、高価なものであったかどうかは、それぞれが成長し過去を振りかえった時、自分自身の想い出の中にどれだけかわっていたかにつきるのではないだろうか。

(板橋区大原児童館)



私がつとめる養護学校の子どもたちの中には、電車が好きな子どもが何人もいる。それぞれの子どもの遊びの中にあられる電車のイメージは個性的である。その一方で、それらをあわせたものは、子どもにとつての電車のイメージを公倍数のような形であらわしているようにも思えて面白い。

K太はブラレールの模型電車で遊ぶ時、陸上競技場のトラックに似た、単純な線路をつくらせる。そして必ず、モーターのついた車両だけを走らせる。さらにもう一台を線路に乗せる。二台の車両は、小さな生き物が追いかけっこをしているように、勢いよく走り回る。K太は、それを見ているうちに、まるで電車を応援するかのように両方の手のひらをハタハタと振り、うれしそうに笑う。

この子どもにとつて、電車は自分の力で躍動的に動く、生命に満ちあふれた存在でなくてはならない。決して客車を引いてのろのろ走ってはならない

のだ。

また、この子どもは追いかけっこをすることを好む。ぐるぐる回る電車は、すべり台やトランポリンのまわりで大人と追いかけっこをするK太の姿によく似ている。K太は、エネルギーに走り回る電車に自分のイメージ、あるいは、そうありたいと望む自分のイメージを見ているのだと思う。

U平は、引き戸になった出入口に、一瞬胸からもたれかかることがある。ふだんは何かどたばたした動きの多いこの子どもが、急にゆっくりとした動きで二、三步移動して左手首を見て何やらする。と、また出入口にもどつてもたれかかり、半身をのり出すようにして右腕をおもむろに前方にあげる。

電車が駅に着いた時の車掌の動作をまねしているのだ。

この子どもがまねするのは、あこがれる気持ちがあるからだろう。この子の目には、職業的要請に

よって洗練された車掌の正確で無駄のない動作が、何か美しい舞踏のように見えているのではないか。

U平は、模型の電車の車両をいくつもつないで長くする。それを何本か作って床に横に並べて、電車の先頭をきれいにそろえる。自分もはらばいになって、目線を床すれすれにする。電車の一本をゆっくり動かしながら、ドドドドドドという電車の音をゆっくり言ったり早く言ったりする。そうやって、どこかの駅で急行電車の通過待ちをする場面を再現して遊ぶ。

C介が好む〈新幹線ごっこ〉は、イスを列車の座席のように並べておいて、自分は乗客になる。他の子が一緒に座ってくれるとなお良い。大人には乗務員のまねをさせる。まねは停車駅と到着時刻の案内からはじまって、洗面所、電話の案内、食堂の案内など、微に入り細をうがつほど良いらしい。C介は、ココッコッコ、ココッコッコと列車の音のまね

をしている。鉄橋にさしかかると、カッカカカ、カッカカと音を変える。大人ははさみやホッチキスをもって切符の検札をしたり、おもちゃかごを抱えて車内販売をする。

「えー、コーヒーに紅茶、ビールにおつまみ、ジュースにチョコレート、おせんべいはいかがでしょうか。」

と、全部言いおわらないうちに、C介は

「チョコレート」

などと叫ぶ。

「ユュー（自分のこと）ネー、シート、シート……ジュース。」

と、ふだん母親から止められているあこがれの飲み物を、とろけそうな笑顔で口に出すのもいる。

大人は車内販売を何度もくりかえさせられる。空想の中で、子どもたちは食べきれないほどのお菓子を買いこむ。

子どもにとっての電車の魅力とは、電車だけでなく、窓から見える景色、レール、駅、車掌や駅員やアナウンス、車内販売、果ては乗客まで含んだ全体の魅力なのだろう。

(また他の子の話になるが、ある日私を含めた大人数人と庭のベンチに腰をおろしている時、突然ガタングタンと電車ごっこを始めた。大人と一緒に声をあわせようとすると、急いでそれを制止するように「ねてて」

と言った。この子どもには、眠っている乗客までもが電車の興味深い要素なのだろう。)

子どもが、自分から動くことを体験し、自分で遊びをつくり出し、自分の生活を自分で築く自信をつけてゆくにつれて、電車の遊びも形を変えてゆくように見える。

C介は、私共のところ週二回通っていたころは、電車、電車と泣きながら、新しいプラレールの

電車を探していつまでもさまよい歩いていた。一緒にいる保育者が、今日は新しいのはないのだといくら説明してなだめても、すべての戸棚をあけさせ、それでもあきらめ切れずに泣き続けていた。C介は、確固としたものがなにもない世界を、足が地につかない感じでさまよっているように見え、また、ないことを知っているからこそ探しているようにも見え、ということ、保育後のスタッフのミーティングで何度も話しあわれた。なにかが自分に欠けていて、それを自分で満たすことができないということの表現ではないかという保育者もあった。六歳になる年、母親は自分で決断し、それまでかけもちで通っていた他のいくつかの施設をやめてここだけにすると私共につげた。C介は落ちついた生活を送るようになった。

それから一年たった今、C介は登校するとまずプラレールで遊ぶが、すぐに他の遊びに移ってゆく。一人で庭の水たまりに絵の具をとかしたり、ロッ

カーによじ登って歩いたり、やりたいことは山ほどある。新しい電車は二週間に一度買うという約束になっている。新しい電車を手にした時は

「やったあ。」

とどび上がった叫ぶが、箱からとり出したあとはずぐにあきて他の遊びに移る。しかし、帰りぎわには必ず、持って帰る電車を選んで、自分でビニール袋がいっぱいになるまで入れる。

〈新幹線ごっこ〉はほとんどしなくなった。自分で遊びを見つめるようになってゆくとつれて、ただ座って乗客になり、大人のいう通りに切符を出したり、お菓子を買ってお金をはらったりという受け身の遊びにあき足りなくなったのだろう。さまざまな場面で、

「自分で、やる。」

と、大人の助けを断ることが多くなった。一人で熱心にプラレールの線路をはずしてつけかえていることがある。新しくバイパスをつけたり、高架につく

りかえたりして

「できた！」

とつぶやいている。

大きくなったなら何になりたいかと問われて、乗り物の運転手と答える子どもも多いと思う。この子どもたちは、乗り物に乗ることに魅力を感じ、その運転手になることで一日中乗っていられると考えるのだろうか。学校の子どもたちを見ている、少年期に飛行機にあこがれ、パイロットになろうと考えていた私自身をふりかえっても、どうもそうではないように思える。

子どもたちは、力強く前進し、見知らぬ世界に自分をつれてゆき、自分の世界を拡げてくれる乗り物に、エネルギーと自由の象徴を見、理想の自分を見られるのではないか。運転手になりたいとは、そういう自分を獲得したいという意味なのではないか。

われわれ大人は、平凡な日常生活のひからびて固

い地面を掘りさげることさえ、幸せを今・ここではない、どこか遠くに求めて旅行にあこがれ、乗り物につかの間の現実逃避の夢を託する。乗り物に対する子どもをあこがれは、それが一見どれほど単

純であり、固執と見えようとも、もっと前向きで、必死なものを含んでいるように思う。

(愛育養護学校)

通園バスにて

河野 道子

今年もまた、新入園児を迎える季節がやって来た。入園式を終えてからしばらくの間は、緊張した面持ちの子ども達が、親に手を引かれて通園する。やがて子ども達の顔に緊張の色が消えた頃、通園バスが親の代わりを勤めるようになる。もちろん個人

差があつて、一斉に乗り始めるわけではないが、一学期が終わる頃には、希望したほとんどが、家から最も都合のよい路線の停留所で、乗り降りするようになるのである。

A子は、入園する前から、停留所で姉が通園バス